三島市長選 立候補者の横顔

石井(いしい) 真人(まさと)氏
(無新 39歳)

駅前の再開発に疑問

三島若者元気塾の講師という立場から三島市の行政を見る中で、緩さや甘さを感じ「自分が政治家になって変えるしかない」と決意した。しがみのなさと若さを前面に打ち出す。

「出馬のきっかけの一つ」と語るのは三島駅前再開発計画。市の財政事情や市民合意の不十分さから「優先させるべき事業なのか」と疑問を呈し、「一度立ち止まって見直しを図り、市民の意見を取り入れることが大切」と主張する。

2020年の東京五輪・パラリンピックは任期中の最重要課題と位置づける。「うまく生かすことができれば三島を世界に発信できる」と強調。周辺の公共施設や空き店舗を観光案内所として利用するなど、観光客の受け入れ体制を整える。

現市政を「決断できていない」と分析。「良いことだけでなく、時には厳しい決断を下すことも市長の役割。その覚悟がある」と意気込む。好きな言葉は江戸時代の国学者塙保己一の「世のため、後のため」。妻と娘2人の4人家族。

宮沢(みやざわ) 正美(まさみ)氏
(無新 69歳)

「共生社会」次世代に

韮山高を卒業後、農業を営みながら「いつかこの街のリーダーに」と夢を温めてきた。市議、県議を計20年。自民党の県連三役をすべて務める実績も積んだ。市長選に政治生命を懸ける。

旗印は共生社会と市民協働。格差拡大が進行する中、「弱者に寄り添う」との原点の思いを強める。「地域社会や家族の絆を再生し、次世代につなぐことが使命」。地味な取り組みこそ深掘りするのが政治の役割と説き、その意味で現市政は「総花的」「表面的」と手厳しい。

高層マンションを建設する三島駅前再開発は見直しを明言した。「広域的視点に立ちながら、市民、県、近隣市町、JRと協議する」と主張する。

事業地の大部分が公共用地である点を重視し、「公益的に使うべき」と語る。市民要望の強い南北自由通路を、在来線改札を駅上化して実現させると訴える。

前回の東京五輪で聖火ランナーを務めたことは人生の誇り。安息は2人の孫と過ごすとき。妻と次男と3人暮らし。

豊岡(とよおか) 武士(たけし)氏
(無現 75歳)

路線強化し一層飛躍

「近隣市町から『三島は元気だね』と言われるようになった」。2期8年の実績を踏まえ、次の任期をホップステップに続く「ジャンプ」と位置付ける。

ここ20年、人口を維持してきた三島も現役世代の減少と高齢者の増加が予測され、危機感は強い。看板施策は観光振興と地域経済の底上げ、三島駅前再開発の推進。現路線を継続、強化させ、体力ある自治体に導く考えだ。「伊豆半島のにぎわい再生も重要」と付け加える。

これまでの8年は健康都市を目指すスマートウエルネス、市内を花と緑で彩るガーデンシティーを軸に教育、子育て、高齢者福祉、スポーツ振興と幅広く進めた。地価も上昇した。市民意識調査は住環境の満足度が90%を超え、「市民が誇りを持って暮らせるまちになりつつある」と力を込める。

「24時間365日市長」を自負する。丸1日休暇を取るのは「年に2日程度」と笑う。早朝のラジオ体操を20年間続け、健康維持に余念がない。妻と2人暮らし。